

2022年（令和4年）の漁況

森脇和也・寺門弘悦・岡本 満

1. まき網漁業

(1) 漁獲量の経年変化

図1に1960年（昭和35年）以降の島根県の中型まき網漁業による魚種別の漁獲量の経年変化を示した。

2022年の総漁獲量は約7万5千トンで、前年（2021年（令和3年））比111%、平年（2017年（平成29年）～2021年（令和3年）の5ヶ年平均、以下同様）比103%であった。また、CPUE（1統1航海当たり漁獲量）は54.4トンで、前年・平年をやや上回った。（前年比124%、平年比119%）。なお、2022年の漁労体数は10ヶ統（県西部2ヶ統、県東部8ヶ統）であった。

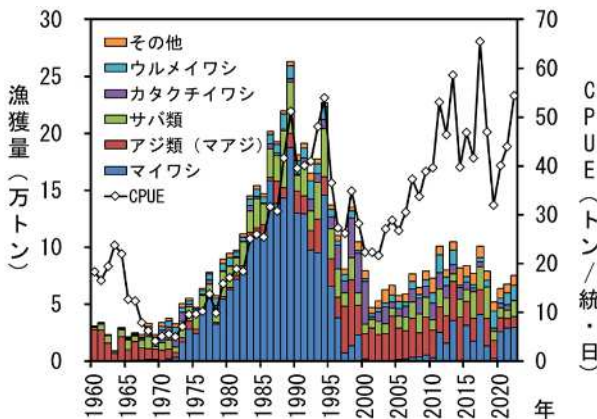


図1 島根県の中型まき網漁業による魚種別漁獲量とCPUEの推移（2002年までは農林水産統計値、2003年以降は島根県漁獲統計システムによる集計値）

本県のまき網漁業で漁獲された魚の主体は、1970年代後半～1990年代前半のマイワシから、1990年代後半にマアジに変遷し、2011年までは同種が主要な魚種となっていた。ところが、2011年にマイワシの漁獲割合が急増し、以後マアジ、サバ類の3種が主要な魚種となっている。魚種別の動向をみると、ウルメイワシ（総漁獲量の18%）は前年を上回り、マイワシ（同39%）、サバ類（同18%）、マアジ（同13%）、カタクチイワシ（同7%）は前年並みの漁況であった。

(2) 魚種別漁獲状況

図2～6に島根県の中型まき網漁業による魚種別月別漁獲動向のグラフを示した。

① マアジ

2022年の漁獲量は約9千5百トンで、前年並みで平年を下回った（前年比109%、平年比57%）。

漁獲の主体は、1歳魚（2021年生まれ）、2歳魚（2020年生まれ）で、0歳魚（2022年生まれ）はあまり見られなかった。山陰沖では例年マアジは春から初夏にかけてまとまって漁獲されるが、2022年1月から7月にかけては、5月に3千4百トンで平年並みとなった他は平年を下回る漁況であった（総漁獲量5千3百トン 前年比131%、平年比58%）。また、9月～11月の漁獲量は前年・平年を上回る漁況であった（総漁獲量3千2百トン 前年比141%、平年比177%）。

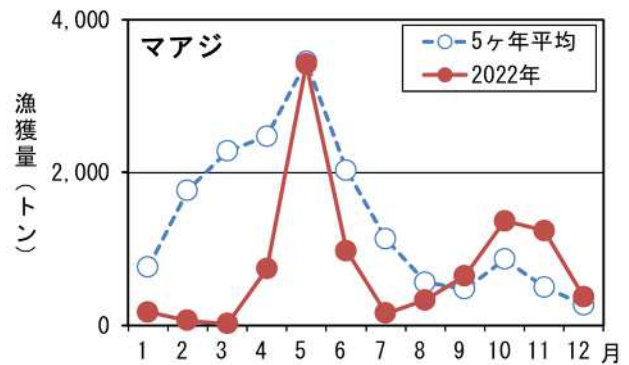


図2 中型まき網漁業によるマアジの漁獲量

② サバ類

2022年の漁獲量は約1万4千トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比188%、平年比96%）。

漁獲の主体は1歳魚（2021年生まれ）で、夏季以降は0歳魚（2021年生まれ）も混じって漁獲され

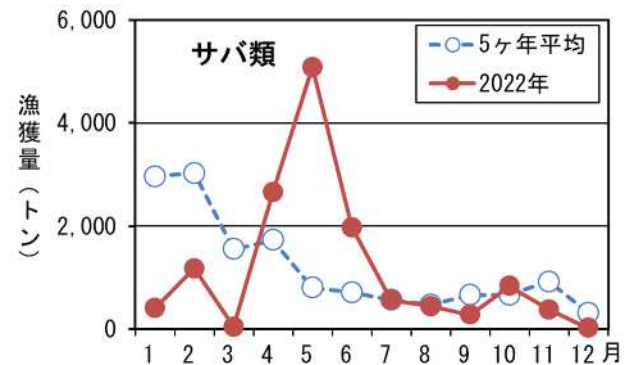


図3 中型まき網漁業によるサバ類の漁獲量

た。山陰沖ではサバ類の漁獲は例年、9月～翌3月が好調であり、4月～8月にかけては低調となる。本年の1月～3月の漁獲量は約1千6百トンで、前年・平年を下回った（前年比38%、平年比21%）。また、4月～6月の漁獲量は約9千7百トンで、前年・平年を上回った（前年比1478%、平年比301%）。

③ マイワシ

2022年のマイワシの漁獲量は約2万9千トンで、前年並みで平年を上回った（前年比102%、平年比133%）。近年の月別の漁獲動向は、県東部を主漁場として3月～6月、9月～10月に漁獲がまとまるが、本年は3月～5月に多く漁獲され、特に3月は1万7千トンと過去5年間でも最も多い漁獲量となった。

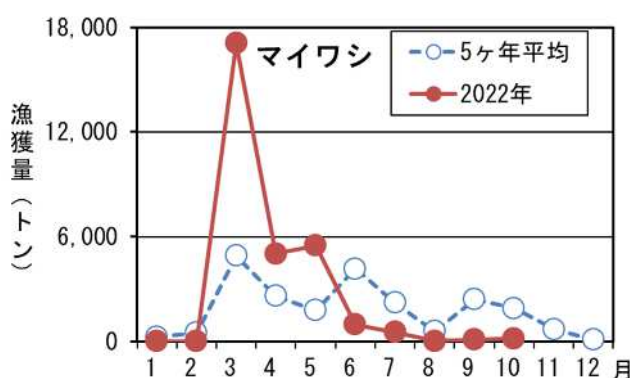


図4 中型まき網漁業によるマイワシの漁獲量

対馬暖流系群のマイワシ資源は2000年以降低水準期が続いていたが、2011年（県中型まき網漁獲量約2万5千トン）から漁獲量が急増した。2012年以降も約1万5千トン～4万トンの漁獲量が続いており、資源量は回復傾向にあると考えられているが、2014年・2019年は低い値となっており、今後の動向を注視する必要がある。

① カタクチイワシ

2022年のカタクチイワシの漁獲量は364トンで、前年・平年を下回った（前年比8%、平年比11%）。

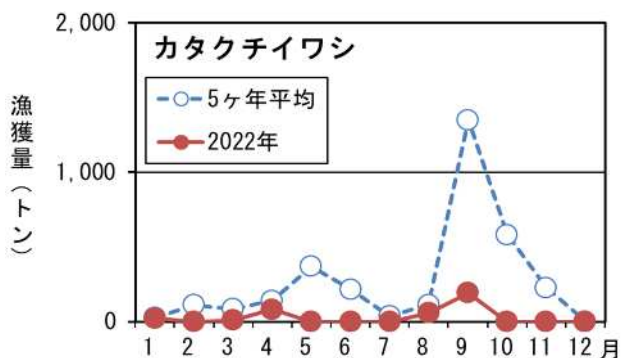


図5 中型まき網漁業によるカタクチイワシの漁獲量

月別の漁獲量の動向をみると軒並み不漁であり、過去5年間で2番目に低い漁獲量となった。

② ウルメイワシ

2022年のウルメイワシの漁獲量は約1万4千トンで、前年および平年を上回った（前年比133%、平年比174%）。近年、ウルメイワシの漁獲量は年変動が大きく令和4年は7月に多かった。

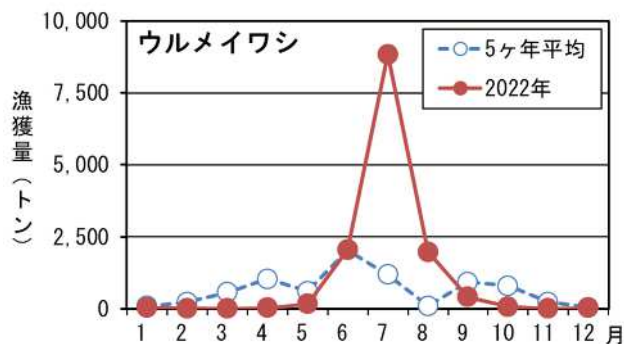


図6 中型まき網漁業によるウルメイワシの漁獲量

2. いか釣り漁業

県内外のいか釣り漁船が水揚げする、いか釣り漁業の代表港である浜田漁港（島根県浜田市）に水揚げされた主要イカ類（スルメイカ、ケンサキイカ）の漁獲動向を取りまとめた。対象とした漁業は、いか釣り漁業（5トン未満船）、小型いか釣り漁業（5トン以上30トン未満船）および中型いか釣り漁業（30トン以上）である。

① スルメイカ

浜田漁港に水揚げされたスルメイカの2017年以降の水揚量経年変化を図7に、水揚金額と単価の経年変化を図8に示した。

2022年の水揚量は91トンで、前年（107トン）を下回り、平年（2017年～2021年の平均：66トン）を上回った（前年比85%、平年比137%）。本県沿岸ではスルメイカの冬季発生系群および秋季発生系群が漁獲対象となるが、近年は両系群とも

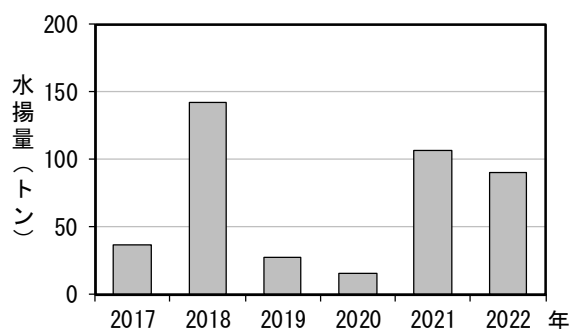


図7 浜田漁港におけるスルメイカの水揚量の経年変化

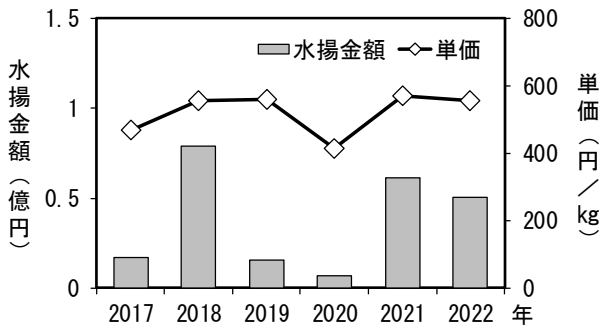


図 8 浜田漁港に水揚げされたスルメイカの水揚金額と単価の経年変化

資源状態が厳しい状況にある※。2007 年以降で見ると、2016 年までの水揚量は 79 トン～957 トンの間で変動し、150 トンを下回る年は 2009 年のみであった。2017 年以降は水揚量が 150 トンに達する年はなく、依然として低調な漁況が続いている。

2022 年の水揚金額は約 5 千万円（前年比 82%、平年比 140%）であった。キログラムあたりの平均単価は 555 円で、平年（514 円）の 1.1 倍であった。

スルメイカの月別の水揚動向を図 9 に示した。島根県沖では、例年、冬季から 3 月にかけて冬季発生系群の産卵南下群が、3 月以降は秋季発生系群の索餌北上群が漁獲対象となる。2022 年は、3 月～5 月にまとまった水揚げがあった。2007 年以降で見ると以前は 2 月をピークに冬場にまとまった水揚げがあるパターンが多かったが、2017 年以降は春から夏にかけて水揚げが多くなるパターンがみられるようになり、スルメイカの発生状況が変化しているのかもしれない。

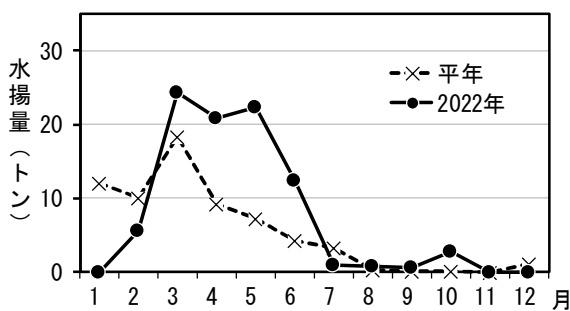


図 9 浜田漁港におけるスルメイカの月別水揚動向（平年は過去 5 年（2017 年～2021 年）の平均）

※（国研）水産研究・教育機構 水産資源研究所による令和 4 年度のスルメイカの資源評価では、冬季発生系群、秋季発生系群の親魚量は、MSY（最大持続生産量）を実現する水準を下回るとされている。

② ケンサキイカ

浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの 2017 年以降の水揚量の経年変化を図 10 に、水揚金額と単価の経年変化を図 11 に示した。

2022 年のケンサキイカの水揚量は 22 トンで、前年（58 トン）・平年（101 トン）を下回った（前年比 38%、平年比 22%）。水揚金額は約 3 千万円（前年比 42%、平年比 27%）であった。キログラムあたりの平均単価は 1,562 円で、平年（1,387 円）の 1.1 倍であった。

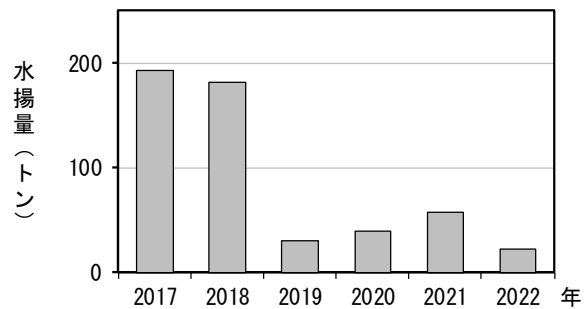


図 10 浜田漁港におけるケンサキイカの水揚量の経年変化

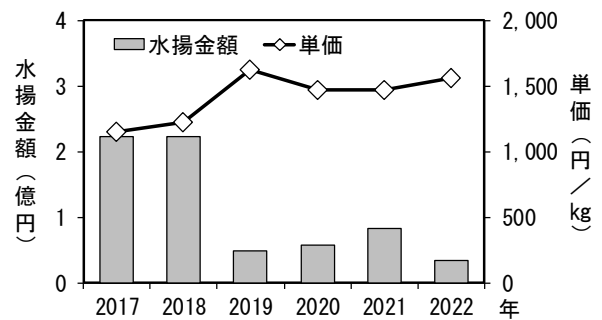


図 11 浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの水揚金額と単価の経年変化

ケンサキイカの月別の水揚動向を図 12 に示した。2022 年のケンサキイカ漁は、大型のケンサキイカ型が主体となる春夏来遊群（4 月～8 月）は、5 月下旬から水揚量が増え始めた。その水揚量は 16 トンで、平年を下回った（平年比 31%）。小型

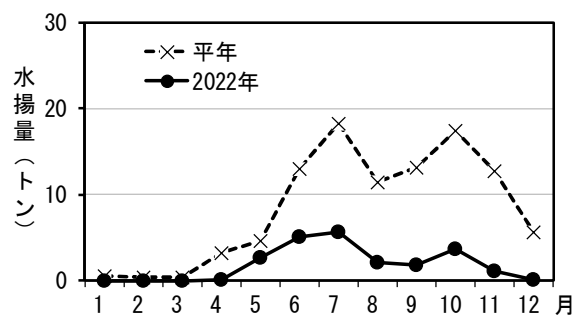


図 12 浜田漁港におけるケンサキイカの月別水揚動向（平年は過去 5 年（2017 年～2021 年）の平均）

のブドウイカ型が主体となる秋季来遊群（9月～12月）の水揚量は平年を下回る7トン（平年比13%）であった。2006年以降、春夏来遊群の漁況が不調である一方、秋季来遊群の漁況は好調である傾向が続いていた。しかしながら、2019（令和元）年から4年連続して秋季来遊群の不漁が続いており、2022年はさらに春夏来遊群も低調な漁況に留まり、今後の資源動向を注視する必要がある。

3. 沖合底びき網漁業（2そうびき）

本県では現在、浜田漁港を基地とする4統が操業を行っている。本報告では、この4統を対象に取りまとめを行った。ここでは統計上、漁期年を用い、一漁期を8月16日～翌年5月31日までとした（6月1日～8月15日までは禁漁期間）。

(1) 全体の漁獲動向（図13）

浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業（操業統数4統）の2022（令和4）年漁期（2022年8月16日～2023年5月31日）の総漁獲量は2,149トン、総水揚金額は14億3,741万円であった。また、1統当たりの漁獲量（以下、CPUE）は614トン、水揚金額は4億1,069万円で、漁獲量は平年並み、水揚げ金額は平年を上回った（過去10年平均：623トン、3億1,861万円）。

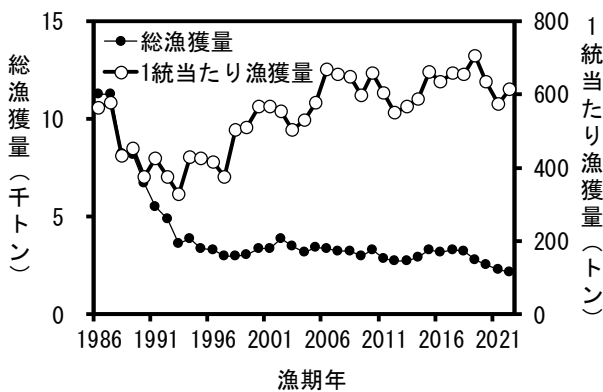


図13 浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1統当たり漁獲量の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向（図14）

① カレイ類

ムシガレイのCPUEは30トンで平年の6割、ソウハチのCPUEは24トンで平年の6割、ヤナギムシガレイのCPUEは11トンで平年の9割の水揚げであった。

② イカ類

ケンサキイカのCPUEは32トンで平年の8割、

ヤリイカのCPUEは5トンで平年の4割の水揚げであった。

③ その他の魚類

キダイのCPUEは150トンで平年の2.2倍、アナゴ類のCPUEは54トンで平年の1.2倍、アンコウ類のCPUEは24トンで平年の7割、アカムツのCPUEは55トンで平年の1.2倍、ニギスのCPUEは3トンで平年の3割、マフグのCPUEは14トンで平年の4割であった。

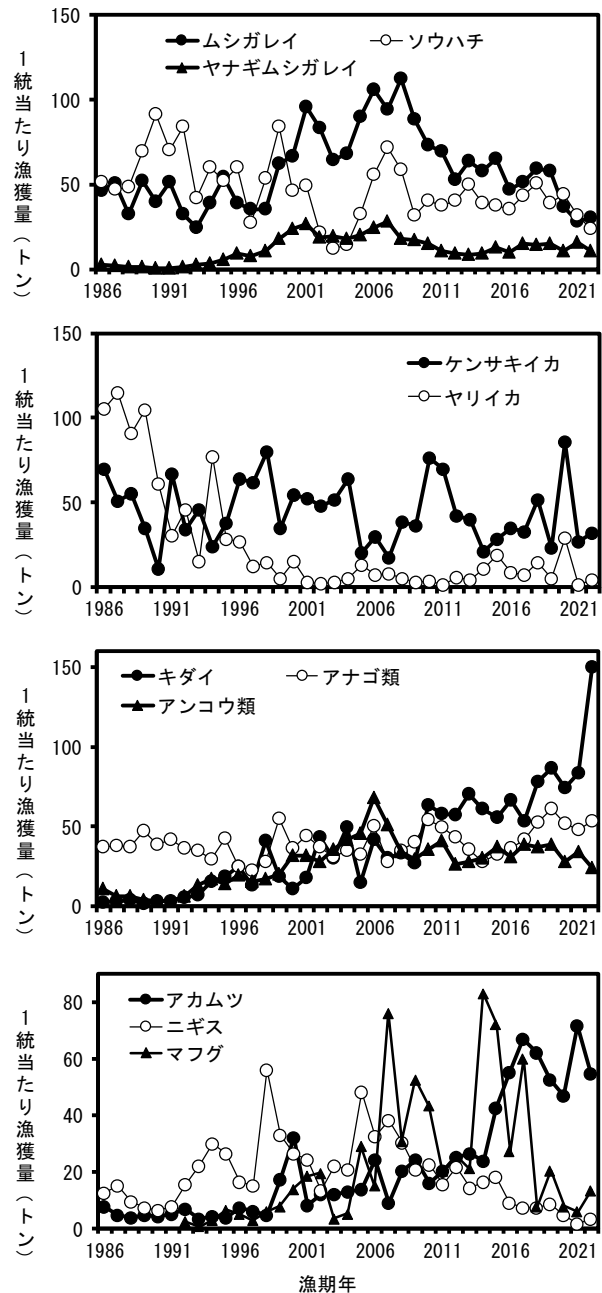


図14 浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業における主要魚種の1統当たり漁獲量の経年変化

この他、マトウダイの CPUE は 35 トン（平年の 1.6 倍）、イボダイの CPUE は 1 トン（平年の 1 割）、マダイの CPUE は 38 トン（平年の 2.3 倍）、カワハギ類の CPUE は 10 トン（平年の 5 割）であった。

4. 小型機船底びき網漁業第 1 種（かけまわし）

小型機船底びき網漁業第 1 種は山口県との県境から隠岐海峡にかけての水深 100～200m の海域を漁場とし、現在 37 隻が操業を行なっている。ここでは統計上、漁期年を用い、一漁期を 9 月 1 日～翌年 5 月 31 日までとした（6 月 1 日～8 月 31 日までは禁漁期間）。

(1) 全体の漁獲動向（図 15）

2022（令和 4）年漁期（2022 年 9 月 1 日～2023 年 5 月 31 日）の総漁獲量は 3,173 トン、総水揚金額は 16 億 3,666 万円であった。1 隻当たり漁獲量（以下、CPUE）は 86.5 トン、水揚金額は 4,464 万円で、漁獲量では平年を 8% 下回り、水揚金額では平年を 9% 上回った（過去 10 ヶ年平均：94.1 トン、4,094 万円）。

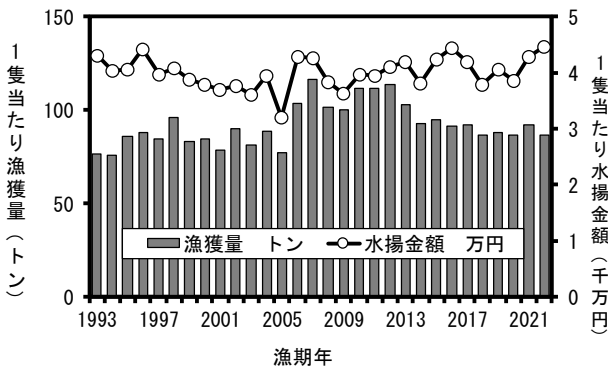


図 15 小型機船底びき網漁業第 1 種における 1 隻当たり漁獲量と水揚金額の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向（図 16）

① カレイ類

ソウハチの CPUE は 14.1 トンで、前年・平年の 8 割の水揚げであった。ムシガレイの CPUE は 2.3 トンで、前年の 9 割、平年の 8 割であった。メイタガレイの CPUE は 0.4 トンで、前年・平年の 5 割であった。この他、ヤナギムシガレイの CPUE は 1.6 トン（平年の 1.2 倍）、アカガレイの CPUE は 4.2 トン（平年の 7 割）、ヒレグロの CPUE は 5.5 トン（平年の 8 割）であった。

② イカ類

ケンサキイカの CPUE は 0.6 トンで、前年の 2.0 倍、平年の 4 割の水揚げであった。ヤリイカの CPUE は 1.8 トンで、前年の 3.1 倍、平年の 6 割の水揚げであった。スルメイカの CPUE は 2.3 トンで、前年の 1.1 倍、平年の 1.0 倍の水揚げであった。

③ その他の魚類

アカムツの CPUE は 3.3 トンで、前年の 9 割、平年の 8 割の水揚げであった。この他、アンコウ類の CPUE は 10.1 トン（平年の 1.3 倍）、ニギス

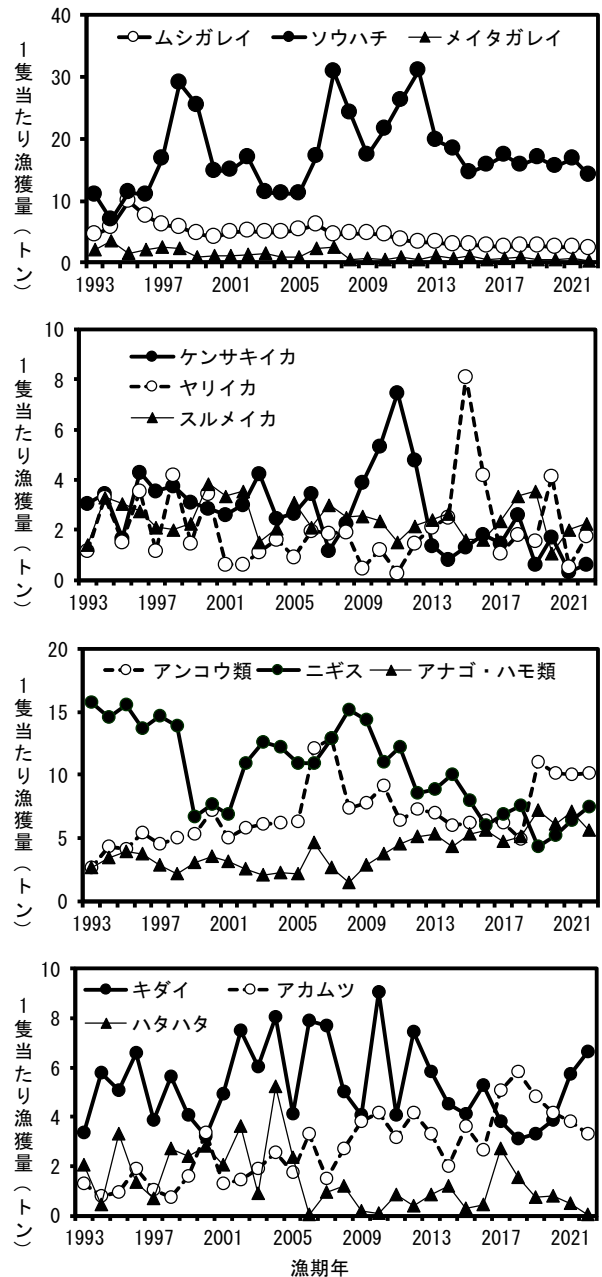


図 16 小型機船底びき網漁業第 1 種における主要魚種の 1 隻当たり漁獲量の経年変化

の CPUE は 7.5 トン (平年の 1.0 倍)、アナゴ・ハモ類の CPUE は 5.6 トン (平年の 1.0 倍)、キダイの CPUE は 6.6 トン (平年の 1.4 倍)、ハタハタの CPUE は 0.002 トン (平年の 1 割未満) であった。

5. ばいかご漁業

石見海域におけるばいかご漁業は、小型底びき網漁業 (第 1 種) の休漁中 (6 月～8 月) に行われる。漁場は本県沖合の水深 200m 前後であり、2022 (令和 4) 年は 3 隻が操業した。

解析に用いた資料は、当センター漁獲管理情報処理システムによる漁獲統計と各漁業者に記帳を依頼している標本船野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、漁場利用等について検討を行った。なお、漁獲量および水揚金額の 9 割程度占めるエッチュウバイについては、別記のエッチュウバイの資源管理に関する研究を参照のこと。

(1) 漁獲動向 (図 17)

2022 (令和 4) 年漁期の総漁獲量は 81.4 トンで前年度比 82%、総水揚金額は 5,416 万円で前年比 131% だった。漁獲量は、1989 (平成元) 年の 175 トンから増減を繰り返しながら減少傾向を示し、2009 (平成 21) 年以降は 100 トン以下で推移している。平成 20 年代の始めまでは 6 隻～7 隻が操業していたが、徐々に減少し、2016 (平成 28) 年以降は 3 隻のみの操業となったことが、総漁獲量減少の一因と考えられる。

水揚金額も漁獲量の減少に伴って低下傾向であり、2003 (平成 15) 年～2014 (平成 26) 年は漁獲の大部分を占めるエッチュウバイの価格が 500 円/kg を下回っていたが、2022 年はエッチュウバイの価格が 651 円/kg と持ち直した。

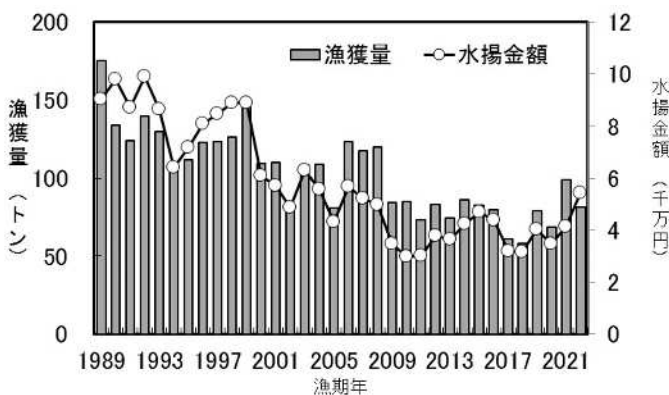


図 17 石見海域におけるばいかご漁業の漁獲量と水揚金額の推移

(2) 1 隻当たり漁獲量 (図 18)

2022 (令和 4) 年漁期の 1 隻当たりの漁獲量は 27.1 トンと前年比 82% で、1989 (平成元) 年以降では、2021 (令和 3) 年、2016 年 (平成 28) 年に続き 3 番目に多かった。また、平成 17 年 (2005 年) および 2009 (平成 21) 年に大きく減少したが、2019 (令和元) 年以降は平均 27 トン程度で推移している。

1 隻当たり水揚金額は、1,805 万円と前年比 131% で、1989 (平成元) 年以降で最高だった。平成元年以降、増減を繰り返しながら平成 21 年には 576 万円まで低下したが、その後回復して平成 26 年 (2014 年) 以降は 1,000 万円を超えている。

漁獲の主体であるエッチュウバイの資源水準が良好と考えられるため、1 隻当たりの漁獲量および水揚金額はそれを反映して高くなっている。

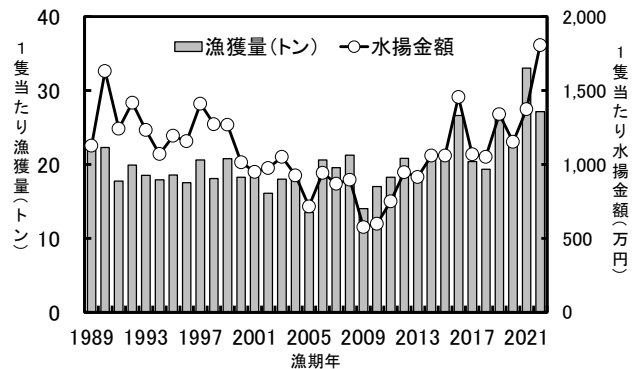


図 18 石見海域におけるばいかご漁業の 1 隻当たりの漁獲量と水揚金額の推移